

年頭のご挨拶 「新たな視点」

林産試験場長 中島俊明

2012年の新春を迎え、謹んでご挨拶を申し上げます

昨年は、世界同時不況の洗礼からの立ち直りに向かっていた林業・木材産業関係者にとって、東日本大震災により再び混乱、混迷した一年でしたが、震災からの復興の兆しも徐々に見え始めたところです。私ども林産試験場も、地方独立行政法人の一員として再スタートを切って既に2年近くを迎え、今後、どのような新たな視点を盛り込んで研究を進めていくのか、あらためて検討していく必要があると考えています。

新たな視点をイメージするヒントのひとつは、業界ニーズ、行政ニーズの中にあります。最近、たとえば「森林資源の循環利用による地域の振興」といったフレーズが、行政、業界双方からよく聞かれますが、この言葉の中には、二つの大きな視点が含まれているのではないのでしょうか。

ひとつは、国内の森林資源が充実し、自給率50%を目標に様々な取り組みを進める中で、貴重な森林資源の適切な管理のもとで、木材の生産、利用にも改めて焦点が当たるといった視点。

もうひとつは、製材工場、集成材工場など個々の業態をターゲットにするだけでなく、循環利用システムを構成する地域の企業群を対象に研究開発を進めるという視点です。

こうした視点は、林産試験場などが昨年度から取り組んでいる戦略研究「新たな住まいと森林資源の循環による持続可能な地域の形成」の中でも強く意識されているところです。

また、北海道の主要な森林資源を樹種別にみえますと、

○カラマツは、特に資源が充実する中、ここ数年来の原木需給状況の激変を経て、徐々に落ち着きを取り戻しており、改めてその利用拡大を図ることが重要です。一山伐れば、細いものから太いものまで出てくるわけで、これらをトータルとしていかに付加価値を付けてやるか、バイオマス利用なども含めて、まだまだ研究開発を進めていく必要があります。

○トドマツは、天然林材から人工林材へと資源内容が急激に変化し、関係業界の対応にも大きく温度差が生じているところですが、林産試験場としても、人工林材を強く意識した研究開発をより積極的に進めていく必要があります。

○広葉樹については、道産有用広葉樹の資源が枯渇するとともに、輸入材も大きく減少する中で、たとえばシラカバなど、新たな道産広葉樹資源の活用検討も今後の重要な課題です。

2012年も、林産試験場は、持てる研究資源を最大限に活かして、輸入材との競争に打ち勝っていき、品質の確かな木材製品をより低コストで安定供給していくための研究開発を進め、北海道の発展に貢献していく決意です。

新たな年が、北海道の林業、木材産業にとって、将来に希望が持てる光り輝く年となりますことを心から祈念しますとともに、皆様方の一層のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます、年頭のご挨拶といたします。

